

といふ、それすぎて、十三四以上になりて、髪や、長くなり、帯にいたるまでを、うなるはなり、又わらばともいふは、女のみの名なり、中略今よしあるあたりにて、禮式のとき、わらはといふ御ぐしあり、○振分髪の間は、成長につれて、髪ものび安ければ、一年のうち二度ばかりは、のびみだれたるを、剪そ、ろゆるよし、岷江入楚源氏通勝卿紫の上髪そぎの下にみえたり、源氏の本文に、あふひのまき源氏の君紫の上をともなひて、加茂のあふ女房紫につかふ童女を、源たはむれに、いでねとて、わらはすがたども、おかしげなる髪どものすそ、はなやかにそぎわたして、うきもんのはかまにかゝれるほど、げまにかゝれるほど、げざやかにみゆ○中とあり、此時紫の上十四歳の夏なり、同年の冬、源氏と新枕ある事、同卷にみえたり、源氏は紫式部が胸間より出し作り物語なれど、當時の事物をうつしかきたる物なれば、今より九百年前は、男もたざるほどは、禿なる證とすべし、此風近き比までも残れる事、前に出したる圖を見て、ゑるべし、

〔源氏物語癸〕まづ女房いでねとて、わらはのすがたどものおかしげなるを、御らんす、いとらうたげなるかみどものすそ、はなやかにそぎわたして、うきもんのはかまにかゝれるほど、げさやかにみゆ、きみ上○紫の御ぐしは、われ源君そがんとて、うたて所せうもあるかな、いかにおひや、らんとすらんと、そぎわづらひ給ふ、

〔松屋筆記 六十七〕髪の貌

按に、振別髪は、八歳まで、肩に比べて切たるが、頂の下より左右に別れ、頬のあたりへ垂下れば、振別髪とはいへる也、それは、擧るには、短ければ、春草を髪に擧らんとよめり、

〔萬葉集 十一〕古今相聞往來歌 正述心緒

振別之髪乎 短彌青草 髪爾多 久濫妹乎 師曾於母布

〔空穂物語 藏 開上 一〕女御の君の、ちにもまれたまひし、十のみこ四ばかりにて、御ぐしふりわけ